

# 生権力／生政治の成立と「言説の編制」について —ミシェル・フーコー「生政治」をめぐる—

園江 光太郎<sup>†</sup>

## The Birth of Biopower / Biopolitics and the Organisation of Discourse : A Study on Michel Foucault

Kotaro Sonoe

### 1. 「生政治」とは何か？

#### 1.1 「生物学的な生」に対する統治術

本稿では、20世紀後半に活躍したフランスの哲学者ミシェル・フーコー (Michel Foucault, 1926年～1984年) が提起した「生権力 (biopouvoir)」および「生政治 (biopolitique)」を取り上げ、考察する。

フーコーは、1950年代から60年代にかけて精神医学や臨床医学批判の考古学的研究を進め、1970年代以降は生政治や生権力と呼ばれる統治術および権力論を提起した。フーコーは『性の歴史 I 知への意志』(1976年)の中で、生政治について、人々を出生率、死亡率、平均寿命などに数値化され、「人口 (population)」に還元された人々の「生物学的な生」をコントロールする統治技法であり、18世紀から19世紀にかけて成立した統治技法であると述べていた。

この生政治 (biopolitique) の接頭辞「bio」とは、「人生、生活」を意味する古典ギリシア語「βίος[1]」に由来する言葉である。βίοςには「社会的・文化的な生」という意味があり、生物としての生や生存という意味での生は含まない[2]。古代ギリシアでは社会的・文化的な意味での生と、動物的な生は厳然と区別される。だが現代フランス語におけるbioには、生物としての生も含まれている。

このβίοςとbioの意味のずれは、金森修によれば、βίοςがラテン語に移植された際に曖昧になったという[3]。したがって、biopolitiqueを「生命政治」と呼ぶこともできる。たとえば船木亨は『現代思想史入門』の中で、フーコーのbiopolitiqueに「生命政治」との訳語をあてている。その上で生命政治のはじまりを『臨床医学の誕生』(1963年)に求め[4]、予防医学から生命倫理の考え方を軸に捉えている。あるいはジョルジョ・アガンベンは『ホモ・サケル』(1995年)の中で、「ビオス＝社会的・文化的な生」と「ゾーエー＝剥き出しの生、生物的な生」の対立による

独自の生政治論を提起。アウシュヴィッツに象徴される「収容所の生」へと展開した。だがフーコーの生政治は人の出生から死亡に至る「生」の総体が含まれている。たとえば1976年3月17日講義の中で、フーコーはナチズムについて、18世紀以来配置されてきた新しい権力のメカニズムが頂点に達したものであり、生権力と規律権力の双方による、生物学的調整が緊密かつ執拗に重視されているという[5]。そこには「生命の選別」も内包されている。

#### 1.2 生権力／生政治への言及

生政治や生権力という概念はアカデミズムに大きな影響を与えたが、フーコーが単行本著書の中で生政治や生権力論について述べたのは、実は『性の歴史 I 知への意志』だけであり、18世紀以降のセクシュアリティ研究の文脈で取り上げている。フーコーが生政治や生権力について詳細に展開したのは、1970年代後半のコレージュ・ド・フランスの講義においてである。それは1976年から1979年の3年間にわたって行われ、後に『社会は防衛しなければならない』(1997年)、『安全・領土・人口』(2004年)、『生政治の誕生』(2004年)の3巻にわたって収録されている。まず1976年3月17日講義の中で、フーコーは人口管理を軸に生権力の定義から議論を始める[6]。そして生政治や生権力以前の統治／権力として司牧型権力、内政 (ポリツァイ) [7]、国家理性について論じている。

中山元は『フーコー —生権力と統治性—』(2010年)の中で、フーコーの仕事初期、中期、後期の三期に分け、それぞれ研究対象を文学と精神医学、権力と統治性、自己の解放・配慮・真理を語るパレーシアに分け、その方法論を考古学、系譜学、解釈学と集約している[8]。その上でフーコーは1960年代半ば頃に考古学的方法の限界を認識し、そこからエピステーメーの断絶を考えるようになったという。そしてフーコーが『言葉と物』、『知の考古学』を刊行したのち、エピステーメーを可能にする社会の

<sup>†</sup>2020年度修了 (人文学プログラム)

歴史性についての問題意識からフリードリヒ・ニーチェの系譜学への関心[9]、さらに「マイクロな物理学」としての権力論から、権力が人間の身体、生命、精神に働きかけるとの考えから、生権力という統治術を考えるようになったという[10]。

他方、金森は『生政治の哲学』（2010年）の中でフーコーの生政治論を詳細に分析し、「人口」把握と生の管理という定義が次第に拡大したこと、『安全・領土・人口』で述べた生権力論と、生政治論がほぼ同じ意味で使われていることを指摘している[11]。続く『生政治の誕生』では生政治を新自由主義批判として展開したことを、生政治論からの逸脱としている。金森によれば、フーコーの生政治論は厳密な定義が定まっておらず、ある種の政治的センスに寄り添う中で興味深い問題を発見できるといった評価をしている。

## 2. 生政治の定義

### 2.1 生命概念とは

次に、西洋の科学および哲学における生命概念についてふまえておきたい。フーコーの生権力や生政治は「人間の生物学的な生」をめぐる権力／統治術でありながら、生命概念をめぐる定義はなされてはいない。そもそも何をもちいて生命とみなすか、生命がどのようにして発生するのかといった生命概念は生物学、哲学、宗教では異なる上、生物学においても生気論と機械論の対立と抗争の歴史があった。

生気論 (vitalisme) とは、生命を非生物にはない特別なものとみなす考え方で、生命は身体や器官という物質とは異なる超自然的なものという考え方につながる。それに対して機械論 (mécanisme) は、生命もまた身体や器官という物質に付随した現象とみなす考え方である。

古代ギリシア以来の西洋世界では、人間をはじめとする生物は、身体という容れ物に魂 (*ψυχή*) が宿ることで生命体として誕生するという見方がなされてきた。そしてガレノスは、身体器官の働きは生気によるものとみなした[12]。生気とは、古典ギリシア語で pneuma (*πνεύμα*)、ラテン語で ウィタ (vita) という。vita はフランス語で生命を意味する ヴィ (vie) の語源であるほか、英語のビタミン (vitamin) の語源でもある。生命を pneuma と呼んだのはアナクシメネスとされ、彼は pneuma を氣息であると述べた[13]。

だが17世紀にルネ・デカルトは脳の松果体から精神が発生し、機械としての身体を動かすという心身二元論を提唱した。その後、ラ・メトリは『人間機械論』（1747年）の中で、精神もまた脳の働きにすぎないという人間機械論を提唱。人間の身体を「巨大な時計」[14]に例えていた。

そうした身体および器官を物質の機械的な運動という考え方が確立し、精神もまた脳という物質の働きとされる一方、心の問題は18世紀末から19世紀にかけて登場した心理学および精神分析学により、「心理」という領域をめぐ

る医療的な処方の対象となる。それはフーコーが『精神疾患と心理学』や『狂気の歴史』で探究していることである。

### 2.2 ビンシャによる近代生命概念

フーコーは『臨床医学の誕生』の中で、近代の臨床医学の成立にとってグザヴィエ・ビンシャによる生気論的な生命観の影響を重要視している。ビンシャは『生と死に関する生理学的研究』（1799年）の中で、生命を「死に抵抗する機能の総体である[15]」と定義した上で、動物的生命（摂取や排泄）と有機的生命（感覚や反応）に分けて解明している。

フーコーはビンシャの生命観に着目し、18世紀末から19世紀にかけての機械論と生気論の対立を二次的なものとした上で、生気論を「死論 (mortalisme)」の基盤の上に現れるものとみた[16]。生理学は生気論の影響下で発達したという事情もあるが、フーコーによれば、ビンシャの生気論は、生命を存在論的レベルに位置づけるためであり、生体の非生物に対する対立が知覚されるとする[17]。

フーコーによれば、ルネサンスから18世紀末までの生命概念と、ビンシャ以降の生命概念は明確に区別されるという。それは、病気に関する経験においては、生気論、反生気論ともに「生命が根本的に先在している（アンテリオリテ）ことから生まれた」のに対して、ビンシャは「生命に関する知識は、生命の破壊及びその極端な反対物にその起源を発見する[18]」という。つまり生命および生は死の反対物であり、死を基準として生を見ることになる[19]。

フーコーによれば、ビンシャ以降の生命観が、臨床医学的な知見とそのまなざしにおける「生」でもあるということになる。生権力や生政治におけるフーコーの「生」に対する認識について、このことをふまえておく必要がある。

またフーコーは「生、病、死。この三つは今や技術的にも概念的にも三位一体となる[20]」と述べている。人間の生は病、そして死と隣り合わせの存在であったが、生と病が死によって支配されるようになったという。

このようにフーコーは、ビンシャによる死と対照される生命を近代的生命概念の登場とみなしたが、『言葉と物』では、ビンシャの生命概念が登場した背景を、18世紀の生物学における生物と非生物の対立に求めている。それは成長と生殖を行う生物に対して、成長や生殖を行わない無機物＝非生物を「死」の存在、あるいは生命を破壊するものだという。

そしてフーコーによれば、生命は18世紀末に誕生したという[21]。それまで生命は実在せず、実在していたのは生物だけであるという。さらに生命概念をめぐって、17世紀末までデカルト的な機械論が影響力を持っていたが、18世紀を通じて生気論的な諸テーマが特権を手にしたという[22]。

フーコーに先立ってガストン・バシュラールは『科学的精神の形成』（1938年）のなかで、生命概念を生気論的な概念とみなしている。生命概念とは物質に対して生命の特

別なもののみならず概念である[23]。

次にラマルク以前の進化論的思考について、フーコーは「今日われわれが進化論的思考という何よって理解しているものとは相容れない[24]」と述べている。それは生物の階層的秩序の移動にすぎず、分類学的な知の枠組みに属する「時間をも包含した《タクシノミア》[25]」にはかならないという。このタクシノミアとは分類法のことで、18世紀の「ディスクールの編制」を担う学問体系である。

この「ディスクールの編制」については、フーコーは『言葉と物』の中で、「自然それ自体が、語と標識との、物語と文字との、言説（ディスクール）と形態との、切れ目のない織物をなしている[26]」と述べており、古典主義時代の〈エピステーメー〉とディスクールとの関係を指摘している。ディスクール（discours）とは、狭義には演説や会談などを意味するが、文章も含まれている。フーコー研究においては、ディスクールは秩序や制度の形成というニュアンスで理解がなされている。

フーコーによれば、18世紀の博物学の枠組みでは、器官の運動から生命を認識することができなかったという。だが18世紀末、「生命は分類上の概念から独立したものとなる」、「生命が他のものと同等の認識対象」となったと述べている[27]。フーコーは、ジョルジュ・キュヴィエ以降、「生物学的存在は特定領域化して自律性を回復し、したがって生命は、存在の境にあって、存在にたいして外部にありながら存在のなかに顕示される[28]」と述べている。古典主義時代を通じて生命は延長、重さ、運動に従う物質的存在つまり機械論に帰属していたが、キュヴィエの生命概念は機械論からの離脱によって成立したことを明らかにしている。その上でフーコーは、キュヴィエの生物学と、デヴィッド・リカードの工業所得、人口、地代をめぐる議論と対比して「生物の生活条件、もしくは価値の生産条件によってあたえられたのにほかならなかった[29]」と述べている。

またフーコーは『言葉と物』では生命について「vie」の語を使っている。たとえば生命の科学は「une science de la vie[30]」と書いている。フランス語のvieはラテン語のvitaを語源に持ち、生気論（vitalisme）の語源にあたる。vieは、まずもって生命をあらわす言葉であり、生気、活気、生活や生存なども意味する言葉として使われてもいる。

フーコーによる生命議論の追究は、18世紀以前の博物学が生命を認識できなかったことに対して、無生物から区別された生物の分類やその器官の構造などを研究する生物学（biologie）の成立を見るためであった。そして生権力ないし生政治は、臨床医学、予防医学、福利厚生、都市計画、公衆衛生などによる人口調整のテクノロジーにもとづく権力／統治術であり、当然そこには生の総体が含まれている。

\* \* \*

また、さきにフーコーの生権力と生政治についての定義が定まっていないとの評価について触れたが、この問題で

は近藤和敬が興味深い指摘をしている。近藤によると、フーコーの生権力論の背景には、カンギレムがビジャの生気論分析を通じて見出した「規範」概念があるという。フーコーによる規律権力の特徴付けは、『規範』（norme）と『規範化』（normalisation）が基礎概念として機能している[31]。それはカンギレムの『正常と病理』（1966年）第2版で増補された論文に由来しており、フーコーは1975年1月15日の講義[32]で述べている。

そしてカンギレムは「規範」について疾病に対する「正常な人間」を「規範的な人間[33]」と述べる一方、『規範的』（normative）とは、哲学では事実を規範に関係させて評価したり資格づけたりするすべての判断のことである[34]と定義付けも行っている。

近藤によれば、カンギレムの「規範」概念が、フーコーによって人口調整としての生政治学と、個別の身体を訓育する規律訓練型権力としての解剖政治学という、二つのカテゴリを超えて機能しており、規律と調整の両方に等しく関わっている生権力概念によって上書きされているという。そして規律訓練型権力と生政治の相補性は、いずれも「規範」概念によって生権力と結びついているという[35]。

フーコーは、カンギレムの議論から「正常化＝規範化（normalisation）」のプロセスとして、18世紀に発展した教育の領域における師範学校、医学の領域における病院組織、工業生産の領域、軍隊の領域について述べ、「規範化（ノルム）は決して自然法によって規定されるのではなく、それが適用される諸領域に対して行使しうる要請や強制の役割によって規定される」こと、そして「ノルムには、権力への志向が備わっている」と指摘している[36]。その上で「18世紀に規律と正常化＝規範化とによって確立されたのは、誤認に結びつく権力ではなく、逆に、権力が行使される条件をなすと同時にその結果でもあるような知の形成によってのみ機能するタイプの権力であると、私には思われます[37]」と述べており、身体に対する統治術である規律訓練型権力と、人口＝生に対する統治術である生政治との相補性は、この正常化＝規範化を軸に考えることができる。

### 3. 生政治の誕生

#### 3.1 世界の“数式化”

これまで「生政治」の定義に関わる議論を行ってきた。次に生政治が形成された経緯を見ておきたい。フーコーは生政治の背景として、統計学の発達を指摘している。この統計的な思考の誕生の背景には、古典主義時代にあらゆるものが数量化されたことをふまえておく必要がある[38]。ヤーコブ・ブルクハルトは『イタリア・ルネサンスの文化』（1860年）の中で、14世紀のヴェネツィアとフィレンツェが統計術の郷土となったことを指摘している[39]。とくにフィレンツェでは、国の歳出入、市の人口、受洗者、就学児童、教会、修道院、病院の数、各種産業、金融、貧



民救済の対象となる人々の包括的な統計などが試みられた。

フーコーは『言葉と物』の中で、代数学（マテシス）と分類法（タクシノミア）という知の枠組みを提示し、その具体的な学問として博物学、文法規則、そして富の分析を取り上げた。フーコーによれば、それらは表象の体系として、18世紀における古典主義時代のエピステーメーを概念化しているとみなした。フーコーは「いまや、表（タブロー）のかたちをしたこの空間を、それがもっとも明瞭な形態で現れた分野において分析しなければならない。それらの分野とは、言語（ランガージュ）の理論、分類の理論、貨幣の理論である[40]」と述べている。これはルネサンス以来の数量化思考の結果として誕生した、世界の数式化（statistique）である。

フーコーは数量化について、『安全・領土・人口』の中で統計学と関連して言及している。そこでは、統計学は国家の認識と語源的には同じであると指摘した上で、アイルランドや統一国家形成前のドイツの領邦君主国家で統計学が発展したと述べている。

### 3.2 18世紀の経済政策と生政治の誕生

次に生政治の誕生について、古典主義時代の経済政策も含めて見てみたい。17～18世紀のヨーロッパでは、重商主義（mercantilisme）と呼ばれる経済政策が採られていた。重商主義は、フランス国王ルイ14世の財務総監ジャン＝バティスト・コルベールが始め、保護主義貿易体制、通貨増発、公共事業などによる景気浮揚策が取られていた。

フーコー自身は重商主義について、「国家は貨幣の蓄積によって富まなければならないという原則。次に、国家は、人口の増加によって強力にならなければならないという原則。第三に、国家は、列強との絶え間のない競争状態に身を置いてそこにとどまらなければならない[41]」と定義している。その上でフーコーは、重商主義における統治理念を「国家理性（raison d'État）」に求め、国家の運営をポリツァイに求める。国家理性とは、国家の維持と強化のための統治であり、君主による人治主義的な権力から、君主であっても国家全体の利益にしたがって統治することが求められるようになる。その背景にはスコラ学がある。トマス・アクィナスは『君主の統治について』（1267年）の中で、アリストテレスをもとに「共通善」を君主の統治に求めている。それは「国家理性」のイデオロギー的背景でもある。

次にポリツァイについて説明する前に、重農主義（physiocratie）について説明したい。ルイ15世の時代に起きた戦争と浪費により、重商主義に対して激しい批判を持つ重農主義者（physiocrate）を登場させた。重農主義とは自然価値（第一次産業など自然によって得られる価値）に経済的な価値を求め、製造業や商業を非生産的産業とする考え方にもとづいている。重商主義の保護主義に対して自由放任経済（laissez-faire）をも主張していた。

フーコーは重農主義以降の経済学的な思考の中で、〈貧

乏〉と〈人口〉が新しい概念として再編されたこと、そして労働による富の生産および土地の開墾と農耕を、神の創造に例えて富の源泉とみなす考え方を示している[42]。

フーコーは『狂気の歴史』の中で、「このように、経済的な思考が、〈貧乏〉という概念を新しい基礎にもとづいて磨きあげる。かつてはキリスト教のあらゆる伝統があったし、それによって、具体的で現実的な実在、生き方の現存をもつものは〈貧乏人〉である[43]」と述べている。

このうち「生き方の現存」とは原文では「une présence de chair」で「肉体の存在」という意味を持つ。ここでの肉体とは、霊的な存在に対する現世の存在という意味を持ち、また「〈貧乏人〉である」は「C'était le Pauvre」と半過去形で書かれ、「Pauvre」は大文字で始まる。このフーコーの論述から伺えることは、かつてヨーロッパにおける「貧乏」には、修道院的な「清貧」といったニュアンスがつきまといっていたが、その価値観の変容を想起させる。

フーコーは、重商主義以前では貧困を経済的現象とする考え方がなかったことを指摘している[44]。それまで失業や貧困は、個人の怠惰や道徳的な悪とみなされ、17世紀以降は「非理性」として施療院に監禁されていた。だが18世紀末によく、失業や貧困は物価上昇や人口過剰など、個人の責任に還元できない現象とみなされるようになった。

生政治研究の中では、生政治のはじまりを重農主義による経済的統治に求める議論がある[45]。ケネーによる経済統治の考え方や農業保護策が該当する。

ここでポリツァイの成立について見てみたい。ポリツァイとは、フーコーによれば、住民の福利厚生を軸とした統治技法である。ポリツァイのはじまりは15～16世紀以降であり、当初は国家、領国、都市、公共体（ポリス）あるいは国家（république）と公共体を指していた。その後、16世紀末から17世紀初頭にかけての重商主義との関わりの中で発達した。フーコーは、重商主義時代にはヨーロッパのあらゆる国々が国民の健康に気を使うようになったという。そしてフランスでは、行政官僚のシステムが構築され出生率や死亡率の統計が始まり、イギリスでは大規模な人口調査が始まった。ドイツでは公衆衛生の改善をめざす医療が発達した[46]。またドイツでは、官房学が整備されて大学教員の参画によるポリツァイの統治が行われ、19世紀後半までこのシステムが続いた。

フーコーはこの転換を「殺す権力」から「生かす権力」への転換と見ている。つまり臣民の身体、生命、財産、労働などが君主の生殺与奪権の下に置かれた状態から、臣民は人口増加と経済成長を担う、生かされるべき存在となる。

### 3.3 「労働」の数量化と規律訓練型権力

フーコーは『狂気の歴史』の中で、狂気や非理性に対する隔離、次いで規律訓練型権力による身体への統治技法の確立について、集約的な生産／労働への人々の編制について触れている。そこで、次に労働をめぐるフーコーの考え

方を見てみたい。

私見では、この問題は古典派経済学とくに労働価値論によるところが大きいと考える。富の価値について、重商主義者は貴金属貨幣に価値を置き、重農主義は自然に価値を置く。それに対して労働価値論は、商品の生産に要した投下労働量が商品価値に含まれているという考え方である。アダム・スミスの『国富論』(1776年)により、労働価値論を中心的な価値論とする古典派経済学が確立した。

西洋では古代以来、労働は「奴隷の行為」または「人間の原罪」とみなされていたが、18世紀以降、労働を肯定的にとらえる価値転換があった。ジョン・ロックは『統治二論』(1690年)の中で、農業や鉱物採掘を例に労働の成果が自分のものになるという観点から、労働を私的所有に関連づけて論じた[47]。イマニュエル・カントも『実用的見地における人間学』(1798年)の中で、労働をその成果物の獲得という点から「快」に位置づけた[48]。次にフリードリヒ・ヘーゲルは『精神現象学』(1807年)の中で、人間の自己意識の形成に「労働」を置いた[49]。ヘーゲルの労働観はカール・マルクスやフリードリヒ・エンゲルスらにも引き継がれ、『ドイツ・イデオロギー』(1845年～1846年)の中で、マルクスとエンゲルスは人間の行為すべてを労働に還元した[50]。

貨幣や土地と異なり、労働は人間の行為であり抽象的である。労働価値論とは、その労働を数量化することでもあった。それは人間の身体を、生産においては規律権力＝工場制度の下で「時間」を単位とする労働力に還元するものである。フーコーは1974年に「身体を労働力に変換する役割は、時間を労働時間に転嫁する役割に対応しているのです[51]」と述べ、それを従属化の第二の役割としている。

またフーコーは『言葉と物』で、重商主義時代の貨幣の金属的価値を「表象」と述べる一方、労働を「表象の分析に還元しえぬ次元の原理[52]」と述べている。フーコーはそこに労働を労力と時間からなり、富の交換でなく富の生産を中心とする経済学の成立を見た。そして『性の歴史 I』では、産業資本主義下での人々の身体の労働力化について、規律権力との関係の下に起き直し、近代に向けた「ディスクールの編制」の中で「発明」され動員されたという見方をしている。

またフーコーは『狂気の歴史』の中で、17世紀にヨーロッパ中で行われた狂気や非理性に対する監禁を、「《治安(ポリス)》の問題」と位置づけている。フーコーは、「古典主義時代にあたえられているきわめて正確な意味によると、『治安(ポリス)』とは、労働をぬきにしては生活しえないすべての人々にたいして、労働を可能にし必要とさせる方策の総体をさす[53]」と述べ、ポリツァイは人々を労働に従事させるようにするための規律訓練型の統治術と見ていた。

### 3.4 規律訓練型権力と機械論

機械論と規律訓練型権力の影響についてもフーコーは指

摘している。古典主義時代のヨーロッパでは、狂人とともに「非理性」とされた人々に対する施療院への監禁の結果、修道院をモデルに人々に工場労働に従事させる、規律訓練型権力が誕生した。それはフーコーによれば資本主義的生産に適合した身体への訓育であり、デカルトやラ・メトリーの機械論の登場にも対応している。フーコーは「ラ・メトリーの『人間＝機械論』は、精神の唯物論的還元であると同時に訓育(ドレッサージュ)の一般理論でもあって、それらの立場の中心には、分析可能な身体へ操作可能な身体をむすびつける、『従順』の概念がひろくゆきわたっている。服従させうる、役立たせうる、つくり替えて完成させうる身体こそが、従順なのである[54]」と述べている。

すでに本稿では、デカルトやラ・メトリーの機械論は、人間の身体を精密機器に例えていることに触れた。それは自動人形(Automates)のことであり、デカルトやラ・メトリーの論は、当時の最先端テクノロジーを意味している。そしてフーコーは、自動人形の例えは単なる人体の説明にとどまらず、「縮約された権力モデル」と述べている[55]。今日でも人工知能(Artificial Intelligence=AI)をめぐる、一方では利便性やシンギュラリティ仮説(singularity)といった見方がなされ、他方では将来AIが人間の職業を奪い大量失業が起きることへの懸念からベーシックインカム(最低所得保障制度)の構築が必要とする意見も出されているが[56]、機械論が身体に対する規律訓練型権力の源泉であり、17世紀の機械論は人間観から労働観に至るまで影響をもたらしたというのがフーコーの見方である。そしてそれ以降、機械論が優勢になりつつも、19世紀までたびたび生気論が登場し、機械論と生気論との激しい対立が起きた。

\* \* \*

ここまで労働を軸に規律訓練型権力の確立について見てきた。フーコーが述べた工場労働の制度は、監獄、学校、軍隊とともに規律訓練型権力の場であることと解き明かす議論であった。それは生産に適合する身体への訓育の場であり、19世紀以降の産業資本主義を準備した。

またフーコーは、「人口」調整を性的欲望の装置や生と生殖の問題に関連づけており、生政治を生産／再生産の両面にわたる労働の領域も視座に置いていると考えられる。

## 4. フーコーの理論転換

### 4.1 古典主義時代の「ディスクールの編制」

これまで生政治をめぐる生命概念から経済まで広げて概観してきた。本章では、フーコーによる理論的なアプローチについて考えたい。

まず、本稿の前半では17世紀から19世紀にかけての機械論と生気論について述べてきたが、この時代には、私たちの身体観の転換を促す価値転換がもうひとつあった。古代以来、世界と人間の身体との間に、マクロコスモスとミクロコスモスという照応関係があると考えられてきたが、



古典主義時代にその照応関係が断ち切られることになった。機械論は人間の身体を「世界」から切り離して「物質の運動現象」に還元し、生氣論は「世界」から切り離された身体に生命の固有性を見出そうとしたといえよう。

そしてフーコーは「古典主義時代の《エピステーメー》」にとって基本的なものは、機械論の成功や失敗、自然を数理化する権利や不可能性ではなく、18世紀末まで恒常的で損なわれることなくつづく《マテシス》の関係だからだ[57]と述べている。このマテシスとは、数学の明証性と演繹性をモデルとした諸学の統一化、普遍化の企図をいう。それはデカルトやライプニッツが構想した概念だが、ニーチェが「真昼の正午」と述べた数式的世界観とも考えられる。

フーコーは古典主義時代のエピステーメーを可能にする秩序と認識の関係を、「《代数学》を普遍的方法とする《マテシス》」に求め、「複雑な自然（経験においてあたえられるような表象一般）を秩序づけることが問題であるときには《タクシノミア》を成立させる必要があり、そのためには記号の体系を設定しなければならない[58]」と述べている。そして古典主義時代のエピステーメーを成立させた「ディスクールの編制」の学問として、博物学、貨幣と価値の理論、一般文法を取り上げた。フーコーは一般文法に対して、その「固有の対象は思考でも言語でもなく、言語記号の列として理解された《言説》なのだ[59]」と述べ、言語学の予兆との理解は間違いだとする。その上で「古典主義時代のエピステーメーは、そのもっとも一般的な配置において、《マテシス》、《タクシノミア》、《発生論的分析》の分節的体系として定義できるだろう[60]」と、この三者によるトライアングルを指摘した。ちなみに「発生論的分析」とは原文では「analyse génétique」であり、génétiqueは生物の遺伝に関するものとの意味を持つ。ここでは労働、生命、言語など18世紀に誕生した諸概念を指していると考えられる。

ちなみに分類学はフランス語でtaxinomie、分類法はclassification、統計学はstatistiqueで国家の様々な統計から出発している。つまり分類学と統計学は、その意図や役割を明確に異にする。フーコーは『言葉と物』の中で、博物学や文法規則についてはマテシスとタクシノミアの関係の下で把握していたが、富の分析については別の概念をもって考察している。むしろ富の分析は一般文法や博物学との成立過程の違いを認めつつも、「抽象的理論や現実と外見上の関係をもたぬ思弁の場合とまったく同様」とその同一性を強調している[61]。また、19世紀の人文諸科学の成立を、知の人間学化と「マテシスの放棄」に求めている。生物学など学問分野の自律、知の対象としての人間の成立は、マテシスの後退によって可能になったという[62]。

## 4.2 考古学から系譜学への転換

本稿では、フーコーの生権力ないし生政治論について、

初期の研究から読み直した上で検討してきた。そこで気づいた問題として、フーコーによる古典主義時代の「ディスクールの編制」の内容が、『言葉と物』で開示された認識と、生政治論で開示された認識に大きな隔たりがあることである。フーコーの理論的アプローチは、1960年代までは考古学（archéologie）の立場にもとづいていたが、1970年代以降は系譜学（généalogie）にもとづく立場を公言している。

フーコーによる系譜学への言及は、まず『言語表現の秩序』（1971年）の中で簡単に触れられた。フーコーは『言葉と物』の中で古典主義時代におけるディスクールによるエピステーメーの形成を分析していたが、『言語表現の秩序』ではディスクールとは欲望の対象であり、そうしたディスクールの生産に対する制限の手続きを3点挙げている。それは禁止、分割、「真理と虚偽の対立」による「真理への意志」である[63]。またフーコーは「言説とは、ただ単に闘いや支配のシステムを表現するものではなく、そのために、またそれによって人々がたたかうものであり、獲得しようとする力である[64]」と述べており、フーコーは、偶発事や些細な逸脱を「言説」のうちに求め、そうした「ディスクールの編制」を系譜学の対象とする。

次にフーコーは「ニーチェ、系譜学、歴史」の中で、系譜学を「起源」の探求と対立するものと延べ、偶発事、些細な逸脱、完全な逆転、誤謬、評価の誤り、計算違いなどを見定めることを系譜学の任務とする[65]。

そしてフーコーは、肉体を「様々な出来事の刻み込まれる平面」と延べ、「由来の分析としての系譜学は、肉体と歴史の結節点にある[66]」と述べている。系譜学への移行は、規律訓練型権力や生権力にみられるように、「身体」をめぐる歴史性に対する問題認識とも考えられる。

また、フーコーは『知の考古学』（1969年）の中で、初期の研究を批判的に振り返っている。具体的には『狂気の歴史』、『臨床医学の誕生』、『言葉と物』を取り上げ、とくに『言葉と物』については「方法論的標識を欠いたため、文化的全体性の用語による分析だと信じさせかねなくなった[67]」と述べている。それは、狂気や臨床医学を単独で考古学的に研究したり、『言葉と物』における「表象の体系」と人文学を軸とする見方からの転換を図り、より複雑な角度から「言説の編制」を研究するというものであった。

同じく1969年には、フーコーはカンギレムによる「諸概念の〈転位（デプラスマン）〉と〈変換（トランスフォルマシオン）〉」を軸に「概念がつくり上げられ完成されてゆく多様な理論的境域の歴史[68]」と述べており、これまでフーコーが研究してきた「知の歴史」に対して、バシュラールやカンギレムらの科学認識論（épistémologie）と呼ばれる科学史に対する考え方の下に置き直し、より科学的な見方にもとづいた精緻化を図っている。

他方、フーコーは『知の考古学』を通じて、数量化思考について「富の分析および計量・交換の恣意的諸記号」の認識を明らかにしている[69]。そして古典主義時代の一般

文法、博物誌、富の分析について「諸規則のこれら総体が提出しうる同一性と差異性」について、それぞれの特殊性を指摘しつつ、「いっそう広大な、またいっそう高いレベルの言説の集合をこれらのさまざまに異なった形成＝編制が構成するに十分な類比関係を、提示する[70]」と述べている。

その上でフーコーは、「形成＝編制のシステム (système de formation)」について論じている。それは言説それ自体のうちに存在するもので、「規則として作用する諸連関の一つの複雑な束として理解されなければならない[71]」という。そして形成＝編制のシステムの可動性は、相互に連関をもった諸要素のレベルにおいて、その規則性の一般的形態が変質させられることなく、言説＝実践に統合されるいくつかの内在的変動を蒙ることがありうるという。それにより、「十九世紀全体を通して、刑事法規、人口統計学的上昇、労働力の需要、救済の諸形態、狂人監禁の規約と法的諸条件、などは変容せずにはいなかった[72]」と述べている。

こうしたフーコーによる「言説の編制」を見ていくと、のちの生権力や生政治に至る端緒を見ることができよう。たとえば「人口統計学的上昇、労働力の需要、救済の諸形態」という「言説の編制」からは、人口動態把握、雇用政策、社会保障政策の整備による人々を生から死まで統治してゆく、人々の「生」の統治の源泉を見ることができよう。

フーコーは考古学的アプローチから系譜学的アプローチへの転換により、〈エピステーメー〉を科学認識論の下に再配置し、より精緻化させたといえるだろう。そしてフーコーが生権力や生政治という問題を提起できた背景には、この転換が関わっているといえよう。

## 文 献

- [1] 水谷智博『古典ギリシア語初歩』岩波書店、1990、p.208.
- [2] *A Greek-English Lexicon*, Oxford, 1996.
- [3] 金森修『〈生政治〉の哲学』ミネルヴァ書房、2010、p.132.
- [4] 船木亨『現代思想史入門』ちくま新書、2016.
- [5] ミシェル・フーコー『社会は防衛しなければならない—コレージュ・ド・フランス講義1975—76年度—』石田英敬、小野正嗣訳、筑摩書房、2007、p.257.
- [6] 同書、pp.242-243.
- [7] フーコーは内政をフランス語で「ポリス＝police」と述べているが、今日ではポリスは治安管理能力つまり警察を意味するため、他の研究者に合わせてドイツ語の「ポリツァイ」と呼ばせていただく。
- [8] 中山元『フーコー—生権力と統治性—』河出書房新社、2010、p.10.
- [9] 同書、pp.14-15.
- [10] 同書、2010、p.30.
- [11] 金森、2010、p.35.
- [12] ガレノス『自然の機能について』種山恭子訳、内山勝利編、京都大学学術出版会、1998.
- [13] 『初期ギリシア哲学者断片集』山本光雄訳、岩波書店、1958、p.11.
- [14] ド・ラ・メトリ『人間機械論』杉捷夫訳、岩波文庫、1932、p.108.
- [15] マリー・フランソワ・グザヴィエ・ビシャ『生と死に関する生理学的研究』鮫島夏樹訳、北海道医療新聞社、2016、p.6.
- [16] Foucault, Michel, *Naissance de la clinique — une archéologie du regard médical*, P.U.F., 1963. (Bibliothèque de la Pléiade Œuvres, I, Gallimard, 2015, p.835). (ミシェル・フーコー『臨床医学の誕生』神谷美恵子訳、みすず書房、1969、p.200).
- [17] *Ibid.*, pp.843-844. (同書、p.212).
- [18] *Ibid.*, p.835. (同書、p.201).
- [19] *Ibid.*, p.836. (同書、p.201).
- [20] *Ibid.*, p.834. (同書、p.198).
- [21] Foucault, Michel, *Les mort et les choses — une archéologie des sciences humaines*, Gallimard, 1966. (Pléiade, Œuvres, I, Gallimard, 2015, p.1214). (ミシェル・フーコー『言葉と物—人文科学の考古学—』渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、1974、p.183).
- [22] *Ibid.*, pp.1175-1176. (同書、p.149).
- [23] ガストン・バシュラール『科学的精神の形成—対象認識の精神分析のために—』及川馥訳、平凡社ライブラリー、2012、p.257以下参照.
- [24] Foucault, *op.cit.*, p.1203-1204. (前掲書、p.174).
- [25] *Ibid.*, p.1205. (同書、p.175).
- [26] *Ibid.*, p.1086. (同書、p.65).
- [27] *Ibid.*, p.1217. (同書、p.185).
- [28] *Ibid.*, pp.1333-1334. (同書、p.293).
- [29] *Ibid.*, p.1337. (同書、p.296).
- [30] *Ibid.*, p.1176.
- [31] 近藤和敬「生命と認識—エピステモロジーからみる「生権力」の可能性—」(檜垣立哉編著『生権力論の現在—フーコーから現代を読む—』勁草書房、2011、収録、pp.180-181).
- [32] ミシェル・フーコー『異常者たち—コレージュ・ド・フランス講義1974—1975年度—』慎改康之訳、筑摩書房、2002.
- [33] ジョルジュ・カンギレム『正常と病理』滝沢武久訳、法政大学出版局、1987、pp.118-119.
- [34] 同書、p.104.
- [35] 近藤、前掲論文(檜垣編著、前掲書収録、p.185).
- [36] Foucault, 1974-1975, 1999. (慎改訳、2002、p.54).
- [37] Foucault, 1974-1975, 1999. (同書、p.57).
- [38] 井上智洋『純粹機械化経済—頭脳資本主義と日本の没落—』日本経済新聞社、2019、p.338-339.

- [39] ヤーコブ・ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化（上下）』柴田治三郎訳，中公文庫，1974，上巻 p.85-91.
- [40] Foucault, 1966. (Pléiade, *Œuvres*, I, 2015, p.1124). (渡辺，佐々木訳，1974，p.100).
- [41] Foucault, Michel, *Naissance de la biopolitique. Cours au Collège de France, 1978-1979*, Gallimard-Seuil, coll. « Hautes Etudes », Paris, 2004. (ミシェル・フーコー『生政治の誕生—コレージュ・ド・フランス講義 1978-1979年度—』慎改康之訳，筑摩書房，2008，p.8).
- [42] Foucault, Michel, *Histoire de la folie à l'âge classique*, Paris, Plon, 1961, Éditions Gallimard, 1972. (Pléiade, *Œuvres*, I, Gallimard, 2015, p.460). (ミシェル・フーコー『狂気の歴史—古典主義時代における—』田村俣訳，新潮社，1975，p.430-431，引用箇所はヴィクトール・ミラボー『人間の友』（1758年版）第1巻，p.22).
- [43] *Ibid.*, p.460. (同書，p.430).
- [44] *Ibid.*, p.458. (同書，p.429).
- [45] 中山，前掲書，p.192.
- [46] ミシェル・フーコー「社会医学の誕生」（原文1977）小倉孝誠訳（『フーコー・コレクション6 生政治・統治』筑摩書房，2006，収録）.
- [47] ジョン・ロック『完訳 統治二論』加藤節訳，岩波文庫，2010，pp.326-328.
- [48] イマヌエル・カント『実用的見地における人間学』渋谷治美訳〔渋谷治美，高橋克也訳『カント全集 第15巻』岩波書店，2003〕収録，p.177.
- [49] Hegel, Friedrich W., *Phänomenologie des Geistes*, 1807. (フリードリヒ・ヘーゲル『精神現象学（上下）』樫山欽四郎訳，平凡社ライブラリー，1997).
- [50] カール・マルクス，フリードリヒ・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』廣松渉編訳・小林昌人補訳・岩波文庫，2002.
- [51] ミシェル・フーコー「真理と裁判形態」西谷修訳（1973年5月21～25日，リオデジャネイロ・カトリック司教大学での講演）〔小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編『フーコー・コレクション6 生政治・統治』ちくま学芸文庫，2006，収録〕，p.140.
- [52] Foucault, 1966. (Pléiade, *Œuvres*, I, 2015, p.1280). (渡辺・佐々木訳，1974，p.245).
- [53] Foucault, 1961. (Pléiade, *Œuvres*, I, 2015, p.77). (田村訳，p.82).
- [54] Foucault, Michel, *Surveiller et punir — Naissance de la prison*, Gallimard, 1975. (Pléiade, *Œuvres*, II, Gallimard, 2015, pp.400-401). (シェル・フーコー『監獄の誕生—監視と処罰—』田村俣訳，新潮社，1977，p.142).
- [55] *Ibid.*, pp.400-401. (同書，p.142).
- [56] 久保明教『機械カニバリズム—人間なきあとの人類学へ—』講談社選書メチエ，2018，及び井上，2019.
- [57] Foucault, 1966. (Pléiade, *Œuvres*, I, 2015, p.1104). (渡辺・佐々木訳，1974，p.82).
- [58] *Ibid.*, p.1121. (同書，p.97).
- [59] *Ibid.*, pp.1131-32. (同書，p.107).
- [60] *Ibid.*, p.1123. (同書，p.99).
- [61] *Ibid.*, pp.1219-1220. (同書，p.189).
- [62] *Ibid.*, pp.1415-1416. (同書，pp.370-371).
- [63] Foucault, Michel, *L'ordre du discours*, Gallimard, 1971. (Pléiade, *Œuvres*, II, Gallimard, 2015). [ミシェル・フーコー『言語表現の秩序』中村雄二郎訳，河出書房新社，1972年（改訂版1981）].
- [64] *Ibid.*, p.229. (同書，p.11).
- [65] Foucault, Michel, *Nietzsche, la généalogie, l'histoire, Hommage à Jean Hyppolite*, Paris, P. U. F., coll. Épiméthée, 1971. (Pléiade, *Œuvres*, II, Gallimard, 2015). [ミシェル・フーコー「ニーチェ，系譜学，歴史」伊藤晃訳（蓮實重彦，渡辺守章監修『ミシェル・フーコー思考集成IV』筑摩書房，1999，収録）].
- [66] *Ibid.*, p.1288. (同書，p.20).
- [67] Foucault, Michel, *Archéologie du savoir, éd.* Gallimard 1969. Pléiade, *Œuvres*, II, Gallimard, 2015, pp.18-19). (ミシェル・フーコー『知の考古学』中村雄二郎訳，1981（改訳版初版），p.29).
- [68] *Ibid.*, p.5. (同書，p.11).
- [69] *Ibid.*, p.65. (同書，p.94).
- [70] *Ibid.*, p.67. (同書，p.96).
- [71] *Ibid.*, p.79. (同書，pp.112-113).
- [72] *Ibid.*, p.80. (同書，p.114).